
卒業論文を書くために

「特別演習」(小松靖彦)教材

(青山学院大学・小松靖彦 2020年3月作成)

目次

1. 「特別演習」（卒業論文指導）について
2. 「卒業論文」とは何か
3. 「卒業論文」のフォーマット
4. 研究テーマを発見する
5. 「アイデア」を育てる
6. 「卒業論文」を書くための調査方法
7. データを分析する
8. 第3次資料（先行研究）の収集
9. 第3次資料（先行研究）の引用の仕方
10. 「卒業論文」を書くための処方箋

付録

1. 注での、引用文献の書誌情報の書き方（9-5①の補足）
2. 研究史の整理の仕方（3-1、9の補足）
3. 目次の例（2-4、3-1、10-3の補足）

1. 「特別演習」(卒業論文指導)について

1-1 「卒業論文」の重視

- 自分自身が最も関心のあるテーマを、論文という形の〈作品〉に仕上げる。
- 日本文学科での学びとは…
 - ①問題の発見力
 - ②情報収集力
 - ③問題解決力
 - ④表現力
- ➔ 卒業論文は、これらの力を一挙に高める重要な学びの機会。
- 充実した卒業論文を仕上げる水先案内として「特別演習」を開講する。

1-2 小松担当「特別演習」の卒業論文のテーマ

(1)『萬葉集』を中心とする日本上代文学研究

- 『萬葉集』を中心に、『古事記』『日本書紀』『日本霊異記』などの研究。
- 歌人研究、作品研究、表現史研究、文学に表れた思想・宗教研究、編集・成立研究、受容史(近現代も含む)、翻訳(英訳・韓国語訳・中国語訳など)、教材としての上代文学など。

《過去の卒業論文》

- 『万葉集』翻訳研究——韓国語翻訳テキスト比較を中心に—— ※
- 萬葉集における音と表記の研究 ※※
- 万葉集における聴覚表現とその英訳の研究
- 万葉集と教育
- 万葉集と戦争(『国体の本義』について) ※※

(2)書物学

- 古代の卷子本(巻物)から現代の印刷本・電子本まで。
- 装丁、ブックデザイン、料紙、下絵、書、レイアウト、印刷、編集、出版など。

《過去の卒業論文》

- 色彩の文化史的研究(古典文学における青と緑)
- 日本キリスト教児童書の研究 ※
- 作家と装丁(自装本)
- 書物における本文書体と内容の相関関係 ※
- 書物における料紙の色彩と内容の関係の研究

(3)文学交流の研究

・日本文学と外国文学の双方向的な交流、比較研究、翻訳に関する研究（時代・範囲を限らない）。

・「戦争と文学」というテーマも、「文学交流」の一つとして位置づける。

《過去の卒業論文》

島尾敏雄文学における「死」についての考察

原民喜における戦争と文学

文学における生き残った兵士たち（日米比較）

内山完三の日本観・中国観

大田洋子の文学と戦争——『屍の街』において「私」の眼の映しだすもの—— ※

※＝『緑岡詞林』（青山学院大学日文学院生部会）で読むことができる。

※※＝『青山語文』（青山学院大学日本文学会）で読むことができる。

1-3 小松担当「特別演習」の到達目標

- ① 日本上代文学、書物、文学交流についての、自分の研究テーマを発見する。
- ② 自分の研究テーマを追究するための、自分らしいアイデアを育てる。
- ③ 自分の研究テーマを追究するための調査方法・研究情報の集め方を習得する。
- ④ 自分が得た結論を論文としてまとめる構想力と表現力を身につける。

1-4 小松担当「特別演習」の進め方

- ・卒業論文の書き方の講義と受講生による研究発表の組み合わせ。
- ・早めに全体構想を立案してもらう。
- ・3章程度として、それぞれを①前期発表・②夏季休暇中課題・③後期発表で完成してゆく。
- ・卒業論文の分量：20,000字（スペースを含む。注や参考文献も含む）

❖ 早め早めの準備が重要。

❖ 文章化は時期を決めて集中的に行うようにする。

2. 「卒業論文」とは何か

2-1 「卒業論文」とレポートの違い

- レポートとは…
 - 与えられたテーマについて
 - 先行研究をまとめながら
 - 自分の見解を示す
 - ➔ 先行研究（他人の説）と自分の考えの境界が曖昧になりがち。
- 「卒業論文」とは…
 - 自分自身でテーマを発見し
 - 先行研究を手懸かりとりしながらも
 - 自分自身の方法を編み出して
 - 自分なりの解答を発見して提示する
 - ➔ 今までにわかっていることをまとめるだけでは「卒業論文」にならない。

- ❖ 学部の学生が新発見をすることは難しい。〈発見しようとする姿勢〉が重要。
- ❖ 新発見ができることも十分にある。その場合には活字にして公開する。

2-2 社会に向けての「卒業論文」

- 自分の持っている能力を尽くし、社会に還元することを目標としたい。
- 「ミニ研究者（ミニ国文学者）」になる必要はない。
- 柔軟な発想をはばたかせる場としての卒業論文。

《その例》

「万葉集と教育」という卒業論文

国語教員志望の学生。演習の授業で、『万葉集』の面白さを初めて知る。
しかし、それが伝わっていない現実。

- ➔ ・ 高校生向け国語教科書の『万葉集』の問題点を、現場の教員へのインタビューや学生へのアンケートによって解明。
- ・ 国語教育法の授業で、新しい発想による『万葉集』の授業を実験。
- ・ これらを踏まえて、自分なりの『万葉集』の教科書を試作。

- ❖ 大学卒業後の自分の進路、または自分の趣味（音楽、演劇、ミュージカル、映画など）と結びつけて卒業論文のテーマを選んでよい。
- ❖ 自分の“強み”を活かして、社会に貢献する（青山学院のスクール・モットー「地の塩、世の光」）

2-3 「卒業論文」を成り立たせるもの

- (1) 自分自身のテーマ（自分自身に根ざしたテーマ）
- (2) 先行研究との対決
 - ・今まで明らかにされていることは何か
 - ・未着手の問題は何か
- (3) 先行研究に対する自分自身の研究の位置づけ
- (4) 結論を導き出すためのアイデアと方法
- (5) 調査と考察（分析・解釈）
- (6) 自分自身の結論

2-4 「卒業論文」を〈編集〉する

- ・「卒業論文」は、自分の思考過程・調査過程をそのまま記すものではない。
- ・自分自身で手に入れた結論を、自分が納得し、他人も十分理解できる「姿」に、意識して仕立てることが重要。
- ・「卒業論文」の制作は、〈編集〉作業を伴う。伝えるための工夫が必要。
 - ➡ 「卒業論文」作成のプロセス≠完成した「卒業論文」

❖結論のわからぬままに書かれた「卒業論文」は、読む者にもよくわからない。

❖自分自身が“これが言いたい”ということがわかっていなくてはならない。

❖ただし、100%結論が出てから書こうとすると、書けなくなる。7割結論が出たところで書き始める。書き進める中で結論が明確になる。

❖書き始めて、調べなければならぬことがはっきりわかってくる。執筆は計画的に。

「要旨」について

- ・「卒業論文」全体としての結論はシンプルに。
- ・「要旨」は結論を1000字程度にまとめたもの。
《参考》400字詰め原稿用紙30～40枚の学術論文の「要約」は400～800字程度。
- ・「要旨」にはあくまでも結論を記す。
 - ×「～について研究しようとした。」 → 決意表明 ≠ 「要旨」
 - ×「～について研究した。」 → 概要報告 ≠ 「要旨」

3. 「卒業論文」のフォーマット

3-1 「卒業論文」のフォーマット

I 序論（序章）

- ①テーマについての自分の問題関心、視点、方法の提示
- ②先行研究の整理と問題点の指摘
- ③先行研究の問題点を踏まえて、より明確に論文の方向を提示する
《注意》序論の末尾で、「卒業論文」全体の結論をある程度予告する。

II 本論（第1章～第3章程度）

- ④分析と解釈
 - i 先行研究を手懸かりとした考察
 - ii 自分で集めた第1次資料（後述、6-1）を中心とした証拠の提示
- 《注意》「章」「節」に分けて記述する。論旨の展開に最も適切な組み立て方を工夫する。「章」ごとに小さな結論をまとめる。

III 結論（終章）

- ⑤論文全体の結論の提示
- ⑥残された研究課題や今後の研究テーマについての言及、および謝辞

3-2 序論の末尾での結論の予告

- ・ I 序論の末尾で、「卒業論文」全体の結論をある程度予告する。
- ・ 予告によって、論の方向を指し示す（読む者にマップを示す）。
- ・ どこに連れ行かれるかわからない論文は、読者を惑わせる。
×「これから～について考察したい。」 → 宣言 ≠ 予告

「予告」の例

①小松靖彦「萬葉集翻訳の創造性—ケネス・レクスロスの翻訳の詩学—」（『国語と国文学』第96巻第11号、2019・11）による

本稿は、詩人で日米の文学研究者のモーガン・ギブソン(Morgan Gibson)が、ケネス・レクスロスの翻訳家としての評価を確立したとする『日本詩歌百選』に焦点を絞り、その翻訳の理念とそれを実現するために用いた縮約・並置・対照という方法を論じ、その意義を1940、50年代のアメリカ合衆国の政治・文化・文学の中で捉え直すものである。

②小川靖彦「もう一つの防人像—堀辰雄のノット「(出帆)」をめぐる〈戦争と萬葉集〉—」（『文学』第16巻第3号、2015・5）による

堀辰雄が、太平洋戦争下において政府と軍と国文学者によって兵士の理想像とされた「防人」を主人公する小説を構想していたことの意味は大きい。ただし、その構想を記したノット「(出帆)」

のめざした小説が、先行研究の主張する「反戦小説」であったとは考え難い。むしろ、太平洋戦争末期の絶望的戦況の中で、次々と命を失ってゆく若い人々に対して、日本人の基層にある死生観を示し、その魂を鎮めるために構想されたものであったと思われる。

本稿は戦争下の稀有な知性的良心的『萬葉集』受容という観点から、堀のノオト「(出帆)」を捉え直すことを試みるものである。

3-3 本論の組み立て方

- 「卒業論文」を一つの物語として〈編集〉するためには、Ⅱ本論を3章程度に分ける。
 - 3つ程度の小テーマを立てる。
 - 「章」ごとに小さな結論をまとめる。
- 「章」の下に「節」を設ける。
 - ひとつの「章」について、3～5節程度。
 - ひとつの「節」は、2000字前後（400字詰め原稿用紙5枚程度）。
- それぞれの「章」の小さな結論、そして「卒業論文」全体の結論を説得力あるものとするために、Ⅱ本論は工夫の見せ所。
- 〈編集〉の仕方はさまざま（証拠の列挙／作品に即した解説／多角的な立論など）。
- 「卒業論文」という物語には、“自然な流れ”というものが、実は存在している。

❖ 8枚程度で進んで、書くことに詰まった場合は、“自然な流れ”ではないということ。そのときは、思い切ってその8枚を捨てる。

3-4 「卒業論文」を仕上げる原動力

- 研究テーマや作品・資料と不断の対話が、「卒業論文」を仕上げる原動力
- 方向がわからなくなったら…
 - ① 作品・資料にもどる。
 - ② 自分が最初に感じた疑問や関心を見つめ直す。
- 3章程度からなる本論を作り上げるためには、狭く深く作品・資料を探究するだけでなく、幅広く関心を持つことが重要となり。
 - ➡ 常に大きなテーマを意識する。
- 「卒業論文」を仕上げるためには、考えるだけでなく、「行動すること」も力となる（後述、4-4）。

❖ 先行研究に圧倒されそうになったり、先行研究が少なくて不安になったりしたときには、必ず出発点に戻る。それが羅針盤となる。

4. 研究テーマを発見する

4-1 研究テーマを選ぶときに悩むこと

- 「卒業論文」は研究テーマを発見するところから始まる。
- しかし、研究テーマを選ぶのに、多くの学生が悩んでいる。それは、小学生から大学3年までの約15年に及ぶ、「与えられた課題を解く」という訓練の結果。
- 今日、その悩みはますます深い。
- 具体的には…
 - **自分が研究したいテーマがよいか、それとも研究しやすいテーマがよいか？**
 - **卒業論文指導の先生にテーマを合わせた方よいか、そうでなくともよいか？**
 - **自分にはそもそも研究したいテーマがない。**

4-2 「やりやすいこと」よりも「やりたいこと」を

- 1～3年生のときの「与えられた課題」のレポートならば、研究しやすいと考えがち。
- しかし、「壁」の突き当たったときに、乗り越えられないことが多い。
- 自分自身の内側なる「声」に耳を傾け、今最も深く学びたいことを、「卒業論文」のテーマとする。
- 研究したいテーマならば、「壁」に突き当たっても乗り越えられる力が湧く。
- ❖ 大学卒業後の自分の進路、または自分の趣味（音楽、演劇、ミュージカル、映画など）と結び付けて卒業論文のテーマを選んでよい。（2-2）
- ❖ 「卒業論文」を「仕事」と位置づけ日常生活から切り離す、ということをしてしない。
- それでも悩むときに考えるのは…
 - 大学に入学するとき、自分は何を学びたいと思っていたのは何か。
 - 1～3年生のとき、大学生活全体の中で、最も面白いと思ったことは何か。
（サークル、アルバイト、ボランティア、就職活動など全てを含めて）
- 1～3年生のときまでに学んだことと、全く異なるテーマを選んでもよい。
《例》「書物における本文書体と内容の相関関係」を書いた学生は、「特別演習」で初めて指導教員（小松）の授業を履修。2、3年生は文学の授業を履修していたが（書物学の授業はなかったため）、ずっと文庫本の書体について研究したいと思っていた。

4-3 指導教員の研究分野は縛られない

- 学生は指導教員の研究分野に、自分の研究テーマを合わせなければならないと考える。
- しかし、その必要はない。

《例》近代小説を愛読するとともに古典にも関心を持っていた学生が、指導教員(小松)のもとで「卒業論文」を書くことにし、「近代小説における萬葉集受容」というテーマを設定した。しかし、よく指導教員と話し合ったところ、戦争・軍隊に関わるある近代作家の小説に最も関心があることがわかった。そこで、「萬葉集受容」を切り離し、その作品論にテーマを変えた(戦争と文学は指導教員の関心のある領域なので指導可能)。

- ❖自分が本当に研究したいことを、シンプルに研究することが重要。
- ❖それに気づくために、指導教員と十分に話し合うことが必要。

4-4 自分に研究したいテーマがない、という場合には

- ・それでも研究したいテーマがない、という場合には、二つのケースが考えられる。
- ・[第1のケース]
 - ・学生が、幼いときから自分のしたいことを我慢してきたり、前もって「正解」がないものに挑戦することを恐れたりして、自分の本当の関心・興味を封印してしまっている場合。
 - 《対処法》・自分の内なる「声」に従ってよい、と自分自身を勇気づける。
 - ・指導教員や同じ「特別演習」の仲間に背を押してもらおう。
- ・[第2のケース]
 - ・さまざまな理由によって、どうしても内発的に研究に取り組むことができない場合もある。
 - 《対処法》・この場合、学生は指導教員にテーマを与えてほしい、と思いがち。
 - ・しかし、実際に与えられたテーマで研究を始めると、モチベーションが上がらない。
 - ・例外として、今まで書いたレポートを参考に、「これならば研究しやすい」と思えるテーマを選ぶ。

4-5 「卒論ノート」に書き出す

- ・小型のノート(A5判〈6号〉推奨)を「卒論ノート」として、常に携帯する。
 - ・自分が研究したいと思うテーマ(複数)を、このノートに書き出してゆく(ブレイン・ストーミング)。その中から、テーマを選び出す。
 - ・今までどのようなレポートを書いてきたかを書き出したり、図書館やネットで気になった作者や作品を記録したりする。
 - ・やがて、このノートに「アイディア」、調査項目、作品・資料の読解なども記す。
- ❖小さめのノートの方が、気軽に書け、携帯しやすい。

5. 「アイデア」を育てる

5-1 「卒業論文」を支えるもの

- ・自分らしい「アイデア」が、「自分自身が最初に感じた疑問や関心」（3-4）を研究テーマにまで押し上げ、結論を導き出すための支え。
- ・自分らしい「アイデア」によって発見し、導き出した結論であると思えるときにこそ、自信を持って「卒業論文」を書き進めることができる。

- ・自分らしい「アイデア」とは、例えば、…

- このような視点から、作品・資料を見ると、今までとは異なる見方ができる。
- 今まで見過ごされてきたことばや表現に注目すると、今まで以上に作品が読める。
- 作品・資料を、別の作品・資料と並べてみると、違った見え方がする。
- a 作品が発表された時代を、地方新聞のバックナンバーによって浮き彫りにする。
- b 今まで研究されていなかった戦時中の子供向け『萬葉集』を調べる。
- c 映画化された谷崎潤一郎の作品の字幕翻訳と原文を比較する。

- ・どうすれば、自分らしい「アイデア」を育てることができるのか。

- ① [手を使う] 手を使いながら、作品・資料と対話し続ける。繰り返し読んでは、気づいたことを、調べたこと、考えたことを「卒論ノート」（4-5）に書く。
- ② [第2の武器] 一つの視点から作品・資料を見ているだけでは煮詰まってしまう。“複数の視点”から作品・資料を見つめ直すことを心がける。

《上の例で言えば…》

- a 文学作品 [第2の武器]=新聞
- b 『萬葉集』 [第2の武器]=戦争、児童文学
- c 谷崎潤一郎の作品 [第2の武器]=映画、翻訳

- ③ [行動する] 作品・資料にかかわる「物」や「事」を実際に体験する。

5-2 「アイデア」を育てる〈第2の武器〉

- ・自分らしい「アイデア」を育てるのは、〈第2の武器〉、つまり複数の視点。
- ・例えば、『萬葉集』の研究の場合…
 - ・『萬葉集』についての知識を深めたり、先行研究を読んだりするだけでは、新しい研究は生まれない（1200年に及ぶ研究の歴史がある！）。
 - ・『萬葉集』に新しい光を当てるものは、意外にも『萬葉集』そのものからやや離れたもの。
 - 書物の歴史／紙の歴史／書の知識／同時代の敦煌写本
 - 植生学／生態学

5-3 〈第2の武器〉を手に入れるために

- ・〈第2の武器〉を手に入れるためには…
 - (1) 普段からの自分の興味・関心や、自分の趣味を「卒業論文」に生かす。
 - (2) 日本上代文学研究・書物学・文学交流以外の分野にも広く関心を持つ。
- ・さまざまな分野が、〈第2の武器〉となってくれる。

哲学 思想史 言語学 社会学 政治学 心理学 芸術学 美術史 絵画史
書道史 古筆学 工芸史 デザイン史 和紙研究 文化財学 文化人類学 民俗学
宗教学 神話学 神道学 仏教学 生態学 植物学 道具史 色彩学・光学
人文地理学・自然地理学 女性学 日本近代文学 外国文学 比較文学 翻訳・翻訳論
受容理論 中国古典学 有職故実 歴史学 考古学 音楽学 戦争学・平和学など
- ・さまざまな分野へ興味を広げるためには…
 - ① 関心ある分野について、ネットで検索する。
 - ② 大型書店や、大きめの図書館の関係あるコーナーに足を運ぶ。
 - ③ 「百科事典」（ウェブ版も）、専門的事典（例、『和紙文化辞典』）で調べる。

5-4 「アイディア」を育てるために行動する

文学研究の場合

- ・作品の舞台を訪ねたり、作品が表現するものを追体験したりする。

《例》島尾敏雄「出発は遂に訪れず」の舞台（加計呂麻島呑之浦）を訪ねる
『萬葉集』で「清し」と讃美された、川の瀬音を聞きに行く

書物学の場合

- ・実際に書物を見ること。実物が見られない場合には複製でもよい。

《例》イタリア・ボローニャ絵本原画展に仕掛け絵本を見に行く
日本近代文学館で初版本を実際に手に取ってみる
西本願本萬葉集の複製本で、その大きさを実感する

文学交流研究の場合

- ・比較したい文学に関して、大使館、留学生、関連する機関などから生の情報を得る。

《例》内山完造が創業した内山書店（東京）に行ってみる。
大使館企画のイベントに参加する。
戦争関係の資料館や遺跡を訪ねる。

❖ 五感を通して学んだものは、「卒業論文」作成のための力強い支えとなる。

6. 「卒業論文」を書くための調査方法

6-1 3種類の資料

- 「卒業論文」の基礎となるのが、3種類の資料。
 - [第1次資料] = 研究対象とする作品・資料
 - [第2次資料] = 研究対象とする作品・資料に関わる作品・資料
 - [第3次資料] = 研究テーマに関する先行研究（研究書・論文・ウェブなど）

《例》『萬葉集』における伊勢神宮についての研究

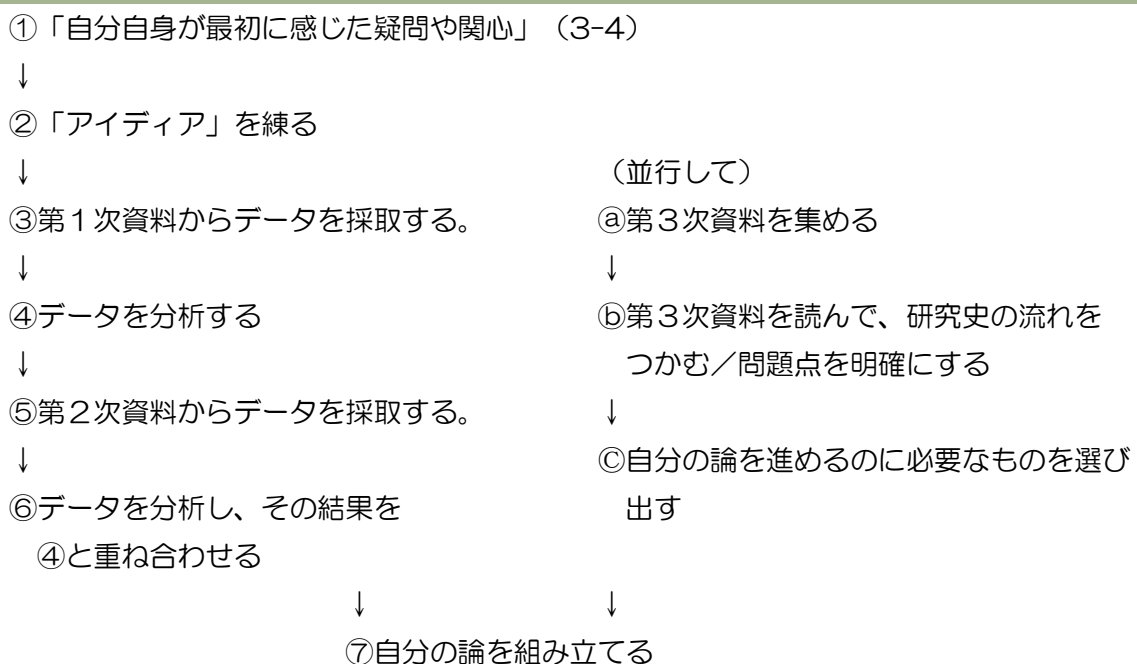
第1次資料=『萬葉集』

第2次資料=『古事記』『日本書紀』『続日本紀』『延喜式』などの歴史資料

第3次資料=『伊勢斎王宮の歴史と保存』(三重の文化財と自然を守る会、1977)、山中智恵子『斎宮志一伝承の斎王から伊勢物語の斎宮まで一』(大和書房、1980)、岡田精司「古代における伊勢神宮一皇子の参宮伝承を中心に一」(『上代文学』第63号、1989・11)など

- 資料の違いを意識して、第1次資料・第2次資料をベースに論を組み立てる。
- 第1次資料・第2次資料から採取したデータが十分であれば、論は自然と立ち上がってくる。

6-2 研究の進め方(大きな流れ)



6-3 信頼できる第1次資料・第2次資料を手に入れる

文学作品や歴史資料を第1資料・第2次資料とする場合

- ・信頼できるテキストを使用する。

〔古典文学〕＝「新編日本古典文学全集」（小学館）、「新日本古典文学大系」（岩波書店）など。

〔近代文学〕＝文学者らの全集。必要な場合には、初版本。

〔歴史資料〕＝「新日本古典文学大系」、「増補改訂国史大系」（吉川弘文館）、「現代史資料」（みすず書房）など

〔翻訳〕＝国際交流基金の「日本文学翻訳検索」を参考に情報を集める。

https://www.jpf.go.jp/JF_Contents/InformationSearchService?ContentNo=13&SubsystemNo=1&HtmlName=search.html

- ❖手元の研究用には文庫本を使ってもよいが、最後は必ず信頼できるテキストに拠る。

「書物」を研究する場合

- ・原本、または原本に近い複製本を使用する（図書館などが所蔵）。
- ・近代日本文学の「書物」については、古書で安価で購入できることもある。

〈参考〉聞き書き・インタビュー・を第1次資料とする場合

- ・栗原俊雄「記憶を歴史に記録する」（『戦争と萬葉集』第2号、2020・2）参照。

6-4 第1次資料・第2次資料からのデータの採取

文学作品や歴史資料を第1資料・第2次資料とする場合

- ・「自分が最初に感じた疑問や関心」（3-4）に答えるための材料を、第1次資料・第2次資料からできるかぎり多く採取する。

- ・必ずデータを「データ・ノート」（B5判大学ノート推奨）に書き出す、またはWordやExcelに打ち込む。そのとき、歌番号やページ数も必ず記録しておく。

《例》 ◇『萬葉集』における伊勢神宮の意義について知りたい

→ 「伊勢」を詠んだ『萬葉集』の歌を全て抜き出す

◇戦争下、大伴氏の誓いの詞「海行かば…」はどのように受容されたか？

→ 戦争下に編集された歌集から「海行かば…」に関する表現を抜き出す

◇大田洋子の原爆文学は小説かノンフィクションか？

→ 作中人物である「私」の視点に変化する場面を抜き出す

- ❖有名作品には「索引」がある。利用してよいが、必ず自分でも確認する。

「書物」を研究する場合

- ・書誌（装丁、寸法、表紙、本文用紙、分量など）、レイアウト、書体などを調査。
- ・文化庁「文化遺産オンライン」、独立行政法人文化財機構「e国宝」も利用する。

7. データを分析する

7-1 「分析」が重要

- 多くのデータの前で途方に暮れたり、データ収集で時間切れになってしまったりすることがある。
- しかし、「卒業論文」で最も重要なのは、データを分析して論を組み立て、自分自身の結論を示すこと。
- ❖ 第1次資料・第2次資料のデータ収集は、早めに着手し、集中的に行う。
- ❖ 「データ集」で終わってしまわないように。

7-2 どのように「分析」するか

- データを採取してゆくと、いくつかのグループがあることが何となく感じられるはず（そう感じられるためにも、できるかぎり多くのデータが必要）。
- その「感じ」を明確にするために、自分なりに基準を設けて、データを分類する。
- ❖ 年表や一覧表を作成することも有効。
- 分類して明らかになった結果を、自分なりに「解釈」する。
 - 《例》戦争下に理想像とされた「ますらを」の、歌集の中の用例
 - ①日中戦争の時代・太平洋戦争の時代での違い
 - ②詠む人による違い(兵士・銃後の人々)
 - ③詠む場面の違い(出征・戦場)
 - ④太平洋戦争末期の特別攻撃隊の歌は全体の中でも特殊
 - 日中戦争の時代には、兵士・銃後の人々を問わず、親しい人との〈別れ〉のときに、「ますらを」を詠む。
 - ・太平洋戦争の時代には、銃後の人々が、兵士集団を、「神」のような勇者と讃美するようになる(兵士が自分自身を「ますらを」と称するのは少数)。
 - ・例外的に特別攻撃隊の兵士は、自分たちを、生死を超越した「ますらを」と歌った。
- ➔【解釈】日中戦争・太平洋戦争を通じて、「ますらを」が道徳として内面化された。

- ❖ 分類をするために、データを採取するときにタグを付けたり、改めてデータをグループごとに紙に書き出したりするとよい。

7-3 文学研究の場合には作品の丁寧な「読解」も大切

- 文学研究の場合には、データを広く集めるだけでなく、問題となる作品や、場面を深く読解することも重要。

《例》◇大田洋子の原爆文学は小説かノンフィクションか？

→ 作中人物である「私」の視点に変化する場面を抜き出す(6-4)

➔ [読解] その場面を、自分のことばで丁寧に説明する

「読解」のための道具(1):注釈書

- ・『萬葉集』などの古典文学について、多くの注釈書が参考となる。
- ❖ただし、注釈書は、作品のことばの意味の解釈が中心。意味がわかりやすい作品やことばには注がついていないことが多い。

「読解」のための道具(2):海外の研究者の文学理論・文学研究

- ・近現代文学については、注釈書がある作品はごく少数。
- ・古典文学についても、注釈書には限界があるため、自分なりに「読解」の方法を手に入れる必要がある。
- ・海外の研究者の文学理論・文学研究が参考になる。

〈参考〉ジョン・ソルトが挙げたシュルレアリスムの詩の要素から(『北園克衛の詩と詩学 意味のタペストリーを細断(シュレッド)する』思潮社、2010)

- ①行の長さ
 - ②古典語を使うか、現代語を使うか
 - ③動的な形象か、停滞的形象か
 - ④田舎の形象か、都会の形象か
 - ⑤文法的に完全な文か、断片的な語句・躊躇などの不完全な発話か
 - ⑥一人称か、二人称か、三人称か、またはそれらの不在化、またはそれらの組み合わせか
 - ⑦暗喩と直喩を使用しているかいないか、換喩(=置き換え)を使用しているかいないか
 - ⑧対話があるか、ないか
 - ⑨色彩が明か暗か、また白黒かカラーか
 - ⑩デザインのために使う単語か、音のために使う単語か、意味のために使う単語か
 - ⑪水平的形象か、垂直的形象か、またはその組み合わせか
 - ⑫終わりのない詩か、ある詩か
 - ⑬ことばによる詩か、写真的な(=造形的な)詩か
- ❖その他に使える道具＝「連続の中の非連続」・「非連続の中の連続」・「無関係なものの並置」・「常套句の一部入れ替え」(例、「雲のなだれ」)・「不釣り合いな組み合わせ」・「多重の意味」など

7-4 「書物」の研究の第2次資料

- ・装丁者のことば、編集者のことば、出版社の歴史などが、第2次資料。
- ・特に近代の「書物」については、出版社の社史が重要。
- ・社史がない場合には、どのような本を出版しているかを、データベースで調べる。

8. 第3次資料(先行研究)の収集

8-1 第3次資料(先行研究)を集める意味

- ・レポートでは第3次資料(先行研究)をまとめることが中心となりがちであった。
- ・「卒業論文」での、第3次資料の使い方はレポートとは異なる。それは…

- ① **自分の研究テーマについて現在までにわかっていることを知る。**
- ② **先行研究を読むことで、自分の問題意識を明確にする。**
- ③ **自分の結論を堅固なものとするため、または自分の結論を読者にわかりやす伝えるために「利用する」。**

❖先行研究に「正解」が書いてあるわけではない。あくまでも、自分自身の結論を導き出すための手段として、先行研究を「利用する」。

8-2 第3次資料(先行研究)の集め方(1): 図書

(1)『萬葉集』を中心とする日本上代文学研究

(a) 事典から情報を得る

『日本古典文学大辞典』(岩波書店)、『日本古典文学大事典』(明治書院)、『国語学大事典』(東京堂出版)、『万葉集事典』(学燈社)、『古事記事典』(桜楓社)、『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー)、『国史大辞典』(吉川弘文館)など

(b) ハンドブックを利用する

『万葉集必携』『万葉集必携Ⅱ』『古事記・日本書紀必携』『日本神話必携』『古典文学基礎知識必携』(いずれも学燈社)、『万葉集歌人事典』(雄山閣)

『萬葉写本学入門』(笠間書院)、『「上代のことばと文字」入門』(花鳥社)など

(c) 基本的図書を利用する

小川靖彦『万葉集 隠された歴史のメッセージ』(角川選書、2010)、矢嶋泉『古事記の歴史認識』(吉川弘文館、2008)、直木孝次郎『万葉集と古代史』(吉川弘文館、2000)など

(2) 書物学

(a) 事典から情報を得る

『日本古典籍書誌学事典』(岩波書店)、『日本書誌学用語事典』(雄松堂書店)、『書道基本用語詞典』(中教出版)、『日本書道辞典』(二玄社)、『和紙文化辞典』(わがみ堂)

Encyclopedia of the Book (Second Edition) (Oak Knoll Press), *ABC for Book Collectors* (Oak Knoll Press)など

(b) ハンドブックを利用する

『新編 出版編集技術』(上・下、日本エディタースクール出版部)など

(c) 基本的図書を利用する

藤枝晃『文字の文化史』(講談社学術文庫、1999)、橋本不美男『原典をめざして』(笠間書院、2008)、橋口侯之介『和本への招待』(角川選書、2011)、小松茂美『展望 日本書道史』(中央公論社、1986)、岡野他家夫『日本出版文化史』(原書房、1981)など

(3) 文学交流の研究

(a) 事典から情報を得る

『比較文学辞典(増訂版)』(東京堂出版)

〈戦争文学〉『日本近代文学大事典』(講談社)、『日本現代文学大事典』(明治書院)、『戦争詩歌集事典』(日本図書センター)、『近代戦争文学事典』(和泉書院)、『アジア・太平洋戦争辞典』(吉川弘文館)など

(b) ハンドブックを利用する

『比較文学の世界』(南雲堂)、『比較文学を学ぶ人のために』(世界思想社)など

〈戦争文学〉*Literature of World War2* (Cambridge University Press)など

(c) 基本的図書を利用する

木村毅『日米文学交流史の研究』(恒文社、1982)、マシュー・レイノルズ『翻訳 訳すことのストラテジー』(秋草俊一郎訳、白水社、2019)、河野至恩・村井則子『日本文学の翻訳と流通』(勉誠出版、2017)、宮永孝『日本とイギリス』(山川出版社、2000)、小森宏美編著『日本とノルウェー交流史』(早稲田大学出版部、2007)、岡倉登志・北川勝彦『日本・アフリカ交流史』(同文館、1993)、山崎利男・高橋満編『日本とインド 交流の歴史』(三省堂書店、1993)、中谷武世『アラブと日本—日本・アラブ交流史』(原書房、1983)、吉田光男編『日韓中の交流』(山川出版、2004)、佐藤虎男『フィリピンと日本』(サイマル出版会、1994)、ウムット・アルク『トルコと日本』(サイマル出版会、1989)、大東和重『台湾の歴史と文化』(中公新書、2020)など

〈戦争文学〉今村冬三『幻影解「大東亜戦争」』(葦書房、1989)、田中綾『権力と抒情詩』(ながらみ書房、2001)、山口俊雄編『日本近代文学と戦争』(三弥井書店、2012)など

全体的に

- ・ 歴史に関する図書は必読 (特に自分の研究テーマに関わる時代について)
「日本の歴史」(講談社学術文庫)、「日本歴史大系(普及版)」(山川出版社)、半藤一利『昭和史』(2冊、平凡社ライブラリー)、「戦史叢書」(朝雲新聞社)など

8-2 第3次資料(先行研究)の集め方(2):ウェブサイト

- ・ データベースを使って、最新の情報を集める (必ず一度は検索するように)
国立国会図書館サーチ、オンライン、デジタルデータベース
国立情報学研究所 CiNii Articles, CiNii Books
国文学研究資料館 国文学論文目録データベース
国立研究開発法人科学技術振興機構 J-STAGE (青山学院大学図書館から利用可)
日本の古本屋

9. 第3次資料(先行研究)の引用の仕方

9-1 第3次資料(先行研究)を「利用する」ときの注意

- 先行研究を「利用する」場合(8-1)、どこまでが先行研究の説であり、どこからが自分の考えであるかを必ず明確にする。
- そのために、その研究文献に対する自分の立場(賛成か、反対か)を鮮明にしなければならない。
- ❖ 「卒業論文」のために、多くの先行研究を見るが必要になるが、「先行研究を集めること」が自己目的化してはならない(「先行研究豆博士」にならない)。

9-2 第3次資料(先行研究)の引用するときの注意

- (1) あくまでも自分の論を進めるために先行研究を引用する。
- (2) 先行研究を引用するときには、それが誰の説かを明記する。
※既に般常識や定説になっている場合には、明記する必要はない。
《例》『萬葉集』が7世紀後半から8世紀前半のやまと歌を集めたものであること
※「～と一般に言われている」「～であるようだ」という曖昧な引用はしない。
- (3) 先行研究を引用するときには、引用文に対する自分の立場を明確にする。
- (4) 先行研究の引用は、自分の「卒業論文」を浸食しない程度にする(長々と引用してはいけない)。

9-3 第3次資料(先行研究)の引用の仕方

- A その説を直接引用する ⇨ 原文でないとその説を伝えられない場合
- ①ある程度の長さを引用する。……全体が本文より2字下げ。引用文末尾に注番号。
 - ②短い文や、語句を引用する。……「 」を用いる。引用文末尾に注番号。
- B その説を自分のことばで要約して引用する
- ……要約の冒頭、または末尾にその研究者の名前を記す。引用文末尾に注番号。
- 《例》小川靖彦「持統王家の集としての『萬葉集』巻一—巻一の増補をめぐって〈書物としての『萬葉集』〉—」(『日本女子大学文学部紀要』第50号、2001・3)による
- ◇犬養孝氏によれば、飛鳥より吉野へのルートは五つある(注1)。
 - ◇「大宝」という元号は、「日本」が中華文明国家として出発したことを内外に示すものであった(渡部修氏)(注2)

- ・長い引用は避ける。できれば本文の中での直接引用Aは避けたい（論文として読みにくくなる）。
- ・直接引用Aは必要に応じて注の中で行ったほうがスマート。

9-4 基本的情報を提示する場合

- ・論の前提として、ある作家の略歴や、作品に関わる歴史的事実など、今まで明らかになっていることを示す必要がある場合には、必ずどの本に依拠したかを明示する。

《例》小川靖彦『萬葉学史の研究』第4部第1章(おうふう、2018(2刷))による
中世の歌人・源孝行の伝記的事実については、池田利夫氏『新訂河内本源氏物語成立年譜攷—源光行—統年譜を中心に—』が詳細を極めている。主に池田氏の年譜に拠り、私見も加えつつ、本論にとって重要と思われる孝行の伝記事項を整理しておきたい。

〈参考〉文学作品・歴史資料の引用の仕方

- ・文学作品や歴史資料（第1次資料、第2次資料）は、できるだけ引用しながら論を進めたほうがよい。読者がその引用を見ながら、分析・読解・解釈が正しいかを判断できる。
- ・引用の仕方は、A①（9-3）に同じ。
- ・ただし、和歌は新編国歌大観番号（『萬葉集』に限り旧国歌大観番号）、散文は依拠したテキストのページ数を引用の末尾に記す。
- ・引用の多い文学作品や歴史資料のテキストについては「凡例」（10-3）に記す。

9-5 注について

- ㊦ 引用した文学作品・歴史資料（引用回数の少ないもの）についての書誌情報を記す（何の本、何のテキストに依拠したか、どのページか）。
- ㊧ 引用した先行文献の書誌情報を記す。
※本文には、引用した先行文献についての情報は最小限しか記さない（著者名、書名・論文名程度）。
- ㊨ 本文の中では展開しにくいのが、省略することのできない問題について論じる。例えば、概念規定、ある作品の成立年代、先行研究の問題点についてのコメントなど。
《例》小川靖彦「持統王家の集としての『萬葉集』巻一一巻一の増補をめぐって〈書物としての『萬葉集』〉」（『日本女子大学文学部紀要』第50号、2001・3）による
（本文）犬養孝氏によれば、飛鳥より吉野へのルートは五つある(注1)。

(注1) 犬養孝氏『万葉の旅(上)』現代教養文庫、175～176頁、社会思想社、1964。五つのルートは、①細川から上市に至る、②飛鳥川上流から上市に至る、③清水谷から壺阪峠を越える、④高取町から芦原峠を越える、⑤吉野口から下市口に至る、というものである。

10. 「卒業論文」を書くための処方箋

10-1 ありがちな、不十分な「卒業論文」

- 不十分な「卒業論文」の3タイプ。
 - (A) 先行研究整理要約型 → 先行研究の整理にはメリハリが必要
 - ×単なる要約に終わっている。
 - ×先行研究の説を自分の考えがまぜこぜになっている。
 - (B) 第1次資料分析型 → 先行研究との対決が必要
 - ×折角の分析の新しさが、明確に示されておらず残念。
 - ×結局従来言われてきたことの再確認に終わっている。
 - (C) アイディア中心型 → 裏付けるデータが足りない
 - ×いくつか重要な指摘があるが、それが十分に展開できていない。支えとなるデータが少ないため。

❖先行研究の収集・整理も、第1次資料の分析も、アイディアも全て揃うように。

10-2 「卒業論文」を書くときに最小限注意すること

- 文体は「である」で統一。
 - ※「です」「ます」は使わない。なお、「だ」「なのだ」はできるかぎり避け、「である」「なのである」を使う。
- 1文1文の長さは短すぎず、長すぎず（自分にあった息の長さ）。
- 段落の長さも短すぎず、長すぎず（段落は主張のめの単位。1段落の主張は1つ）
 - ❖ワープロでの、A4判の一般的設定では、どうしても段落が長くなるので注意。
 - ❖400字詰め（20字×20行）の設定で書くと、段落が適度に短くなる。
- 原稿用紙の使い方は次の点に注意する。
 - ①段落の冒頭は必ず1字下げ。
 - ②原稿用紙に手書きする場合には、行の最後に来る句読点の形式的処理には注意する。
 - ※原稿用紙のマス目の最初に、「、」「。」「や、」「』、」が来てはいけない。これらは前の行の欄外に記す。
- 提出する前に、ワープロ原稿は必ずプリントアウトして、誤字・脱字を修正する。
 - ❖自分では誤字・脱字は発見しにくい。親しい人に目を通してもらうのがよい。

10-3 「卒業論文」の中身の具体的な姿

- 1 扉 論文題目・氏名・文字数を書く。裏は白紙のままでよい。

- 2 目次 「章」や「節」のタイトルとページを書く。
 - 3 凡例 論文全体にわたって使用した作品の本文や、資料が何によるものかを記す
(例えば、「新編日本古典文学全集」の本文に拠ったことを明記する)。
 - 4 序章(はじめに/はしがき) 論文の問題関心、視点、方法を提示する。
 - 5 第1章〔※必ず「章」のタイトルを付ける〕
 - 1 (または第1節)〔※できるかぎり「節」にタイトルを付ける〕
 - 2 (または第2節)
 - 3 (または第3節)
 -
 - 第2章
 - 1 (または第1節)
 - 2 (または第2節)
 -
 -〔※注は①各ページの右端(縦書きの場合)または下(横書きの場合)、②各章の末尾、③本論の末尾、のどこかに記す〕
 - 6 終章(おわりに/あとがき) 論文全体を要約し、今後の課題を記す。
 - 7 資料〔※写真・図表・統計データを大量に添える場合は、ここに一括する〕
 - 8 参考文献 「卒業論文」を書くために参考にした文献(本論で引用しなかったものも含め)全て挙げる。〔※著者別50音順など〕
- ・これに表紙を付ける。他に「論文要旨」がある。

10-4 「卒業論文」を完成するための処方箋

(1) 完璧主義を捨てる。

あるところで、居直って書き始めることが肝要。

(2) 文章は後でも修正できる。

論文を組み立てる構想力も文章表現力も、実際に書き進める中で着実に成長していく。とりあえず書き出して、ある程度力がついたところで、書き直せばよい。

(3) 論文を書くためには集中力と体力が必要。

集中力と体力が、「卒業論文」の文章に“勢い”を与える。文章化する時期には、できるかぎり集中できる環境を整える(アルバイトなどは最小限に)。

(4) 「ことば」を使いこなすことを体得する。

文章や術語は、最初は自分の思い通りにあやつることができない。①手本となる論文をまねること、②毎日「卒論ノート」などに短い文章を書きつけることが処方箋。

(5) 自分自身の Realm (領分/王国) を発見する。

これならば自分の力を発揮できる、と言える研究領域や論じ方を見つける。

——「ボール投げなら僕決してはずさない。」(宮澤賢治「銀河鉄道の夜」)

付録

1. 注での、引用文献の書誌情報の書き方(9-5①の補足)

単行本の場合

- ・著者名、書名（副題も）、章節またはページ数、発行所、発行年

《例》

大野道夫氏『短歌の社会学』Ⅱ-1章・近代化の明治歌人—愛づる明治の精神・佐佐木信綱、はる書房、1999。

犬養孝氏『万葉の旅(上)』現代教養文庫、175～176頁、社会思想社、1964。

秋山虔氏『王朝の文学空間—その始発』『王朝の文学空間』東京大学出版会、1984。

①章立てのある本の1章の趣旨を引用する場合

②章立てのない本の一部を引用する場合

③論文を集めた本の中の1論文の趣旨を引用する場合

※論文集（①の一部の本、および③）については、必要な場合には、初出の情報（どの雑誌の何号にいつ発表されたか）を入れる。

共著の単行本の場合

- ・著者名、論文名（副題も）、編者名、書名、発行所、発行年
- ・編者名、書名（副題も）、章節（分担執筆者名）、（ページ数）、発行所、発行年

《例》

門脇禎二氏「国家史・地域史と齋王宮」三重の文化財と自然を守る会編『伊勢齋王宮の歴史と保存』三重の文化財と自然を守る会、1977。

井上光貞氏・永原慶二氏・児玉幸多氏・大久保利謙氏編『律令国家の展開』日本歴史大系2(普及版)、第1章第2節・律令国家の形成(早川庄八氏執筆)、山川出版社、1995。

雑誌論文の場合

- ・著者名、論文名（副題も）、雑誌名、巻号、発行年月（※「月」を忘れないように）

《例》

武田祐吉氏「萬葉集の古点」『國學院雑誌』第83巻第2号、1952・6。

相原由美子氏「『万葉集』の翻訳—チェンバレンとウェレイーを中心に—」『学苑』593号、1989・12。

ウェブサイト引用した場合

- ・必ず閲覧した年月日を記す（ウェブサイトは頻繁に変更・更新されるため）

《例》

公益財団法人日本近代文学科ホームページ「少年少女雑誌にみる近代」(<http://...>)(*ウェブサイトアドレスを記す) 2018年4月24日閲覧)

2. 研究史の整理の仕方(3-1、9の補足)

- ・ I 序論で、先行研究の整理と問題点の指摘をする(3-1)。
- ・ 今までどのような研究があり、まだ解明されていない問題は何かを明らかにする。

作業の進め方

(1) 自分の研究テーマに関する先行研究(第3次資料)を収集する(8参照)

- ❖ 「先行研究リスト」を作成するとよい。

(2) 先行研究についてのノートを作成する

- ① 先行研究を発表年代順に読んでゆく。
- ② それぞれの本・論文の要旨をまとめる(箇条書きでもよい。本については章ごと)
- ③ 要旨をまとめるときに、疑問に思ったことや、思いついたこともノートする。

- ❖ ノートは紙でもパソコンでもよい。

- ❖ ある時期に一気にこの作業をする。

(3) 自分の問題意識に沿って研究史を整理する

- ・ 軸となるのはあくまでの自分の問題意識。
× ただ単純に並べていく → 一見“客観的”だが、「自分」がない
- ・ <どのような点が自分は不満か・疑問か> <自分が明らかにしようとしているのは何か>を示すために研究史を整理する

《例》小松靖彦「萬葉集翻訳の創造性—ケネス・レクスロスの翻訳の詩学—」(『国語と国文学』第96巻第11号、2019・11)の場合

[従来の研究] 翻訳を『萬葉集』の原文と対照してその美点と欠点を指摘。

[問題点] 外国人読者は、『萬葉集』の原文と対照して読んでいたわけではない。

[私の明らかにしたいこと] ① 翻訳者はどのような理念と方法によって『萬葉集』を翻訳したか。

② それは、翻訳が行われた国の時代背景とどう関わっていたか。

3. 目次の例(2-4、3-1、10-3の補足)

《例》

小松靖彦「萬葉集翻訳の創造性—ケネス・レクスロスの翻訳の詩学—」(『国語と国文学』第96巻第11号、2019・11)

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1 ケネス・レクスロスの掌編翻訳詩集から | (「卒業論文」では序章にあたる) |
| 2 「書物」としての『百選』とその評価 | (「卒業論文」では第1章にあたる) |
| 3 レクスロスの日本詩歌観と翻訳理念 | (「卒業論文」では第2章にあたる) |
| 4 『百選』における萬葉集翻訳の方法 | (「卒業論文」では第2章にあたる) |
| 5 1940、50年代のアメリカ合衆国で | (「卒業論文」では第3章と終章にあたる) |